

斬屋顛末（きりやてんまつ）

木下望太郎

人斬り稼業・斬屋（きりや）を訪れた武家の息子。

持参した名刀で、斬ってくれと頼んだのは自分自身だった!？
が……？

落語調で語られる短編コメディ。

ニート対殺し屋、in江戸——。

目次

第 2 話	第 3 話	第 2 話	第 1 話
-------------	-------------	-------------	-------------

第1話

因果な世でござんすなア、お客人。あんたさんみてエなお若い方でも、斬って捨てたい輩があるなんざ。ま、お上ガンなさいやし。何分やもめの侘び住まい、お構いもできやセンがね。出廻らしでよけりや茶など……あ、結構と。

さてと。若旦那、斬屋きりやへのご用向き、詳しいところ——ああ、これはご無礼。てつきり、どこぞ大店の脛おひだなつかじりかと。お武家の長男坊とはねエ。それにしちや生っ白いが。いやさ、色の白いは七難隠すと申しまして、結構なことで。腰の刀が目に入らなかつたかと？ あんまり自然に差してらしたもんでね、むしろ目に留まりませんで。ええ、鰻に串でも刺したる如くお似合いでござんして。それよっかア聞きやしよう、どこのどなたさんを斬りやアいいんで？

何、どんな奴でも斬れるか、と？ 自慢じやアねエがこの桐谷平九郎、剣術きりやで遅れ取つたること無し……と、ぬかす輩を一二三四五六七、九つ飛ばして八、十ほどは、ざつくと斬って捨てたもんで。斬れぬものなしの斬屋たア、あつしのこととでさ。やけにもじもじとなさる……ははア、何ぞ後ろ暗いことがおありで。何、お氣に

かけるこたゝありますまい。しょせん、人が人に人斬らせるなど、人の道に外れたること。それは外道の底も底、そこより後ろはそこになく、そこより暗きもそこになし。後ろ暗きは遠慮なし、いっそ、ずかりと言いなさいやし。

ただし、いずれでございましょうと。外道のせめてものけじめ、誰を何故斬るのかは、言ってもらうが斬屋の決め事。さ、なんぞ恨みのある輩で？ 出世仇、恋仇？ ははあ、袖にされた腹いせに女をとでも？ それとも――

つて、ちよつと。いきなり奥に上がられても困るンですがな。え？ ああ左様で、そこに掛けてるのがあつしの商売道具でさ。ああ、刀がお好きなんでござンすか、さすがお武家で。

お目汚しですが抜いて見せますか、そら。商売に使い込んでも刃こぼれなし、折れず曲がらずよく斬れる。銘？ ありやアしやせん、相模さがの物とは聞いてますがね。刃紋は飾り気なし、筆でさツと引いたような直刃すぐはの紋。他にも刀があるにはあるが、これが気に入りでございまして。

何です？ ……だから何です、その勝ち誇った目は。あ？ お客人の刀を見てみよと？

どれ、……ほう。ほう……。嘴くちばしの如く切先鋭く、羽根のように刀身伸びやかに反る。刃紋はあたかも陽炎かげろうの如ごと、まるで浮かんで消えるよな。高ぶり舞い散る波飛沫、はたまた、霞にけぶる幽谷の、臚おさふねに揺らぐ森の様さまか。こいつア匂い立つような、いい刀だ。へエ、備前は長船盛光の大業物。中でもこれは二つ名を白鴉しろがらす、見た事も無きほどの出来物と、左様で。

え？ 此度こたびの依頼、これにて斬ってもらいたいと？ ははア……対手あいては何ぞ、ご一族の仇ですか。積年の恨み晴らすべしと、そ奴を家伝の宝刀で……え、違う？ 家伝のものでもないし、何、ふむ……へ？ はアあ？

ご自分を、これで斬れ、とオ？ ……………はは、洒脱なお方だ、ご冗談もたいがい……本気で？ 何で、また。

はア、刀が大好き、そりゃア聞きましたがな。好きで好きでたまらない、左様で。中でもこの刀が一等好きと。

ふむ、ご自分は武家の長男、すなわち武芸弓馬の家の者、闘争に備え刀槍の腕磨くもの。励めどそれがご自分の手に余り——その生っ白い腕じゃ左様でしょうな——我が事ながら情けないと。ならばいっそ死して詫びん、と。そうしてせめて、

心より愛でた刀にて斬られたし。己が体の一部の如くは扱い切れずとも、せめて刃の露として、己を刀の一部としたし、と。

よほどの、お覚悟で。いささかの笑みもなく、冗談でもなさそうにござんすな。膝はずいぶん笑っておいですが。ふうむ、お代金あしは……ああ、それだけありやア釣りが出ますな。返さずともよい？ 左様で。

……良ようう候。良ようう候、お受けしやしよう。御佩刀みはかし、お借り受け致しやす。仕事が済みやア、お家へお返し致しやすので。

うむ、良き刀。抜いただけで違いが分かりますな。さ、お覚悟。

——え？ そりやア今からここでござんす、仕事が早いのが取り柄でして。ご心配どうも、うちの畳なら丁度替えようと思ってた時分で。ささお座りなすって、お髪ぐしに衣服など整えられませイ。整えなさいましたか。良う候。

参りますぞ！ ——と言ったら参ります故、そのおつもりで……ああ、今のは違いますよって、座り直されませイ。

辞世の句？ 念仏？ さしたるものは詠む間もなく、不意に死ぬるが真まことの死にござる。少なくとも、あっしの商いじゃア左様で。ささ、お覚悟。

第2話

さ、ささ。さア。さア、イヤ、さア。さア、さアッ、さア！ 参る——

——のは、やめときやしょう。

泣いた鴉からすがもう笑う、それはよく聞く話なれど、死んだ鴉は泣いたきり。……目エ、拭いなせエ。迷いのあるご依頼は、受けぬことにしております。と申しますか、ちゃんと座ってて欲しかったンですがね。鼻でもかんで落ち着きや、金と刀持って帰ンなせエ。

——と、ン？ 何ぞ、表が騒がし——うおッ！ な、何です奥方、人の家に……と申すか誰……え？ この？ お客人の？ 母君？

ちよ、母君、母君、叩かない、息子殿を叩かないで、落ち着きなすって落ち着きなすって、人んちの急須きゅうすで叩かない！ ほらっもっ割れっ……ああもう！

とにかく、落ち着きなすって……ほら、ご兩人一度離れて、ゆっくり息を吸って——吐いて——はい吸って——あア母君、急須きゅうすは片付けますよってお構いなく。よ

ござんす、ほんとよござんすから。

えエと、で？ 母君は何故こちらに。息子殿の後をつけた、ふむ。え？ えエ

ま、大きな声じゃ申せませんがね、確かに人斬り稼業なぞしておりやす。

……は？ もう一度申して下さい、何と？ 金は払う？ 息子殿を？ 斬っ

てくれ？

ちよ、母君、叩かない、息子殿を、叩かない、泣かないで母君話をちよつ、絞まつ
てる絞まつてるそれ息子殿の首絞まつてる！ 手エ離しなすつて、手！

何、つまり？ 息子殿はロクにお勤めもなさらず？ 病身と申して？ 稽古も

手習いもそこそこに、書画観劇に太刀の鑑賞、お好きな事ばかりで？ はアこの
穀潰しめが恥ずかしいと。いつそ斬つて下さいましと。

なるほどねエ、あア息子殿、首の具合はどうで。え？ そんなだからいつそ斬
られて死のうと？ そうでもしなきゃとんでもない道場に入らされる？ あア平

山先生の。真貫流は厳しいですからな、内弟子ともなりやア生半可な性根じゃ務ま
らねエ。それで狂い死にするぐらいならいつそのこと、つてそりや大袈裟な。

あア母君母君、叩かないで！ ちよ、痛ッ、何を投げて……勿体無い、錢をバ

ラ撒かないで欲しいですがね。へ？ あア確かに、ひィふうみィの、これだけありゃお代金に足りまさア。斬りますかい？ 息子殿を、斬りますかい？ ——
良う候。

しからば息子殿、せめてもの情け。ご自分のご依頼通り、白鴉にて、そつ首ィ斬って差し上げやしょう。いやさ、こりやまた先とは別ですよって、止める理由もありやしませんな。恨みはねエが、ささ、お覚悟。

さア。さア、イヤ、さア。さア、さアッ、さア！ 参る——

第3話

——つて、ウおおっ！ 何、危なッ、何だ！ 何者だあんたア、人んちに太刀だんびら振り回して躍り込むたアどういう了見だ！ どのどいつ——えエ？ こちらの奥方の？ 夫君？ つまりは息子殿の？ 父君ィ？ なるほど奥方の後をつけ、中を見ればこの有様と。すわ、息子の一大事とて止めに入つたところですかい？

息子殿、悪運がござんしたなア。律儀で鳴らした斬屋とて、邪魔が入っちゃ斬れやしねエや。此度は刀を納めますぜ。母君、お代金はお返ししやす、ご依頼は又の機に。

父君、そちらさんもどうかお腰のものをお納め下されィ。だいたいそんな、仇討ちでもあるまいに。白鉢巻にたすきがけ、袴の裾までからげなすつて。さアさ、お刀を鞘へ………つて危なッ！ 振り回さないで、いやさ、あッしはもう斬る気なんざさらさら………つてどちらへ？

あア、息子殿と何ぞ話が？ さもありなん、危機一髪の所にござりました故、息

子殿まだ震えていらっしやいやすぜ。そうそう、そばへずいと寄って言葉の一つもかけて——無言ですかい。左様、親子に言葉は要りませんな。あアされど、息子殿どんどんひどく震えてらっしやいやす、せめてそう、手を上げて、肩に手でもかけておやりに——いやさ、刀はもう仕舞った方がよろしいンじゃ……って、刀を提げた手を上げて、大上段に振りかぶって、息子殿へ向かつて振り下ろ——って待ったア！

待った待った待った危ねエ！ 離せ離せ、つたつて離せませんぜそりや、いたい何でまた。え？ 助けに來た訳じゃアない？ 斬りに來た、息子殿を父君ご自身で？

はア、息子殿が家重代じゅうだいの宝を質入れして、お家の金も持ち出して？ この白鴉を買った？ あらま何と、刀好みもそこまでいっちゃアね。

はアそれで、この馬鹿者めがと。ようもようも我が子ながら、武士の風上にも置けぬ、ご先祖様に申し訳が立たぬ。いっそ我が手で討ってくれよう、と。あアちよつ、ちよつと、どうぞ落ち着きなすって落ち着きなすって。いや、唐変木とうへんぼくのこんこんちきのと申されましても。あアちよつと母君、泣かないで泣かないで。

え、どうしたんで息子殿？ 何？ 何が我が子か、って？ どういうことで？

はア、知っているぞ、って何を。は？ 父君が、浮気を。ほう、四丁堀の小唄の師匠さん、あアあだっぽい良い女でありや、あの人と。へ？ 母君も、こっちはこっちで髪結い床の旦那と。あら。で、あアどうせ俺の生まれも妾腹に違エねエ、さもなきや間男種だ、と。それかいっそ、妾腹の間男種に決まってらア、ってそりゃさすがにおかしい。

あア父君、そんな真ッ赤にならなくたって。あア、何ぬかしやがる、と。この馬鹿息子めがたわけめが、てめエはこのわしが腹ア痛めて産んだ子に決まってる、ってあんたの腹は痛んでないでしょうに。そこへ直れ、己おのが二親も疑うような奴は成敗してくれる、って結句それですかい。

父君お待ちを……あッ！ 何てエ馬鹿力だ、振りほどかれるたア。

父君父君、ちーちーぎーみ！ 危なッ危なッ、と申しますか、人んちで刀振り回さないで欲しいんですがね！ ちょ、ほら障子が、鴨居まで傷が、あああ掛け軸を真っ二つに！ ちょ、お聞きなせイ、落ち着きなせイ、そこへ直れ、ったって息

子殿が聞く訳ないでしょうに。だからお聞きなせイお聞きなせイ、だ、か、ら——
あアコンの……コンの、すつとこどつこいがア……。いい加減にしてもらわねエ
とよ、こっちだって黙っちゃいられねエ。そっちが抜くならこっちだってよ、刀使
わにや止めらんねエや。一丁チャンバラ、致しやしようかい。参りますぜ、でえエ
やア！

——やアア、あ？ あれ？ ウおおオツ!? 何で息子殿、こっちに飛びかかっ
て——と思ったら母君まで息子殿をかばって——ツて痛ッ！ 何であっしやア、父
君にぶん殴られてンですかい？ 痛てて……

何？ 息子殿は白鴉——しろがらす——そういやあっしが持ってやしたね——が傷付くのが嫌
だった？ で、母君は息子殿を父君からかばおうと？ で父君は、何だか知らん
がお二人があっしともみ合つてンで殴った？ はあ。

やれやれ……あっしが請け負いまさア、あんたらよっぽど血の濃い親子だ。揃い
も揃つてそっくりの、とんだ人騒がせときた。

あア息子殿、まだそんな震えて。怖ろしかったでしょうな、二手からの白刃の間、
飛び込みなすつたんだ。はは、左様で、父君がお怪我もなくよござんしたな。全く

もつて、左様で。

やれやれ、良う候、良う候。斬れぬものなしの斬屋とて、親子の縁えにしやあ切れやしねエ。さ、お刀お返し致しやす。父君も刀を納められて。あア母君、障子の切れっ端なんざ片付けますよつてお構いなく。よござんす、ほんとよござんすから。

お後はもう、ささッとお帰り下さいやし。これより面倒にならねエうちにね。あアそうだ父君、息子殿。面倒の元だ、白鴉しろがらすは手放しなせエ。息子殿もぼちぼちお勤めしていただいて、お家重代のお宝も、そのうち買い戻されればいかがでやしよう。あア母君、息子殿を通わせるンなら、緩めの道場がよござんしうな。

え、障子や何ぞの代金？ あアもうよござんすよござんす、とつとお帰り下さいやし。——やれやれ、ようよう行きよつた。

——と思つたら何ぞ、揃つて戻りよつた。いかがしやした、忘れ物でも。

え？ あつしを劍客と見込んで？ これも縁とて息子殿を、弟子入りさせてエと？

よしやしよう。斬れぬものなしの斬屋とて、そこまで面倒、看切みきれやしねエ。

($\bar{J}$)

第2話

「何故出来ぬのかが分からぬ」

——かつて。腹の底から息をつき、肩を落としてそう言ったのだ、父は。八島弘心流四代宗家は。倒れた剛佐を見下ろすその目はまるで、不治の病にある者を見るかのようなだった。三十年ほど前のことであった。

道場の床板の上、汗だまりに突っ伏して、剛佐は目だけ上げていた。口を開いても、かすれた息が漏れるだけで言葉は出なかった。それ以前に、何を言うつもりであるかも分からなかった。

弟、ひろたか 紘孝が進み出る。

「父上、左様におっしゃられずとも。兄上ならきつと、この技もいつか必ず習得なさいましょう」

差し伸べられた手につかまり、身を起こしながら。剛佐は見た、優しげに微笑む弟を。その目の奥を。

握り潰したかった、その手を。けれども指は震えただけで、剛佐は力なく弟にもたれた。もうそうしたことは幾度目か分からなかった。そして、父がこう言うのも。「この程度の技でその様では、到底宗家を継ぐことはなるまい。無論、修めることもできまいぞ。秘太刀、きりつば斬壺をの」

斬壺。八島弘心流初代宗家が編み出した奥義である。初代をして生涯五度しか成功しなかったというその秘太刀は、術理のみ伝わるも、使い手は絶えて久しかった

部屋に残していた銭から代金を叩きつけるように渡し、文を出すよう宿の者にこ
とづけた後。

八島剛佐は駆けていた。宿場の人の間を縫い、肩がぶつかるのも構わず駆けていた。夜が青黒く覆いかぶさる空の中、行く手に沈む日だけが赤々と燃えていた。

人影のない町外れ、道から外れた草むらで。剛佐は腰に手をやった。手が空をつかんだところで、刀がないことをようやく思い出す。顔を歪ませたまま、辺りの木

立から枯れ枝を拾う。枝葉を払い、木刀のように構え、振った。打ち据えるように。何故だ。

剛佐はそう問うた。何故だ、何故だ、と、そう問うた。

頭の内に童の顔が浮かぶ。齒を見せて笑った顔、そこに父の、弟の顔が重なる。まとめて打ち払うように、剛佐は強く枝を振った。

何故だ。越えたはずなのに、なぜまた嘲笑われねばならん。何故だ、何故だ。そう、越えたはずであった、父のことも弟も。秘太刀「斬壺」の会得を以て。

——その夜の剛佐も今と似ていた。父になじられ弟にかばわれた稽古が終わり、気絶するように眠った後。一人庭に出、腰の刀を近くに置き、木刀を手に素振りをしていた。打ち据えるように何度も何度も。打ち据えたかったのは父か、弟か、それとも己かは分からなかった。

素振りの後、その日教えられた技をさらい、型をなぞる。いつしかその動きは教えられたものではなく、父が稽古していたのを見た「斬壺」の型になっていた。

伝によれば。初代宗家はその技を以て、壺を斬ることが出来たという。無論、壺など割ることは誰にでも出来る。初代はそれを、斬った。生涯のうちに壺を二度、漬物石を二度。いずれも、下に据えた台には傷もつけずに。五度の秘太刀のうち最後の一度、それは墓石に、己の墓に据えるための石に、ずか、と切れ込みを入れたという。

斬壺の術理、その骨子は二つ。太刀行きと手の内である。太刀行きとは、すなわち剣速。常の技のような一步の踏み込みではない、三步の助走。その勢いを足裏から足首、足首から脛、脛から膝。腰、背骨の一節一節、肩。腕、肘、手首、手指、柄、刀身、そしてようやく切先へと余すことなく、加速しながら伝える。これにより生まれる神速の太刀行きが、切先に限界まで破壊力を与える。

その破壊力を切断力へと変えるのが手の内、すなわち柄の握りである。太刀を振るう向きによって握りを変えるのが常の剣術であつたが、斬壺はそれに留まらなかつた。太刀が当たった瞬間、その感触に応じて、斬りながらも自在に握りを締め、あるいは緩める。それにより刃は物体に抵抗することなく滑り、食い込み、撫で切り、断ち斬る。脆い壺を砕くことなく、硬い石に刃を折ることなく。

両手で持った木刀を、剛佐は右肩の前で立てた。左足を半歩前に出す、八双の構え。三步踏み込み、振るう。再び構え、踏み込み、振るう。重く夜気を裂くその音は、どうにもいつも通りだった。

「兄上、精が出ますな。秘太刀の稽古にござりますか」

弟が庭に下りていた。手には二振り、袋竹刀ふくろうしな——割竹を細長い袋に入れたもの——を提げている。

「しかし兄上。お言葉ですが、別の稽古をなさった方がよろしいのでは」

「……どういう意味だ」

剛佐の視線を避けるように、弟は首を横に振る。笑って。

「いえ、言葉どおりにござります。我らが流派の秘伝とはいえ、誰も使い手のおらぬ技。實在すら怪しいのではないかと……正直、左様に思いますので」

剛佐は表情を変えなかった。強く握る手に、だらりと下げていた木刀の先が上を向いた。

「嘘ごとと、そう申すか。我らが剣が、その最奥さいおうが」

弟は変わらず笑っていた。

「いえいえ、仮の話にござります。それより一つ、竹刀稽古でもいいかが」

弟が差し出す竹刀を、何も言わずに取った。一礼の後、互いに構える。

いつもの稽古と同じだった。剛佐の竹刀が当たる前に、弟のそれが剛佐を打った。振り上げる出がかりを抑えられ、振り下ろしたところを弾かれ、その隙を打たれ。三本に一本取り返せばよい方だった。

最後、苦し紛れながら全力を込めた、斬壺の型は。あっさりとかわされ、胴を打たれた。

「よい稽古になりました。ありがとうございます、兄上」

額の汗を拭う弟は、変わらず笑っていた。

剛佐に表情はなかった。汗も拭わず、あいまいにうなずいて立ち尽くしていた。弟が部屋へと戻ってしばらくの後。剛佐は立てかけていた刀を取った。鞘を放り捨て、構えるのももどかしく振るう。柄を絞るような力を腕に込めて。碎くように歯を噛み締めながら。己の腕を千切ろうとするかのように、剛佐は剣を振るい続けた。

どれほどの時が経ったであろうか。気づけば空が白んでいた。荒かった息はかす

れ、途切れ途切れにさえなっていた。汗に濡れそぼった着物は外気と同じ温度をしていた。疲れ切ったはずの腕は、何故だか刀の重みを感じなかった。指も柄から離れようとしなかった、まるで、ぴたりと吸いついたように。刀の一部になったかのように。

剛佐は口を開けていた。空が白いと、ただそう思った。それ以外の思考はなかった。空を映す刀身のように。

ふらりと刀が動いた、気がした。その切先の方を見れば、庭石があった。肩ほどの高さがある庭石。斬れそうだな、と、そう思った。口を開けたまま。

気づいたときには構えていた。八双の構えだった。考えたわけでもなく距離を取る。岩へ向かって三步の間合い。

駆けていた。地を蹴る堅い反動が、足の裏から土踏まずへ走る。足首へ巡り、骨を伝い肉を駆ける。腰のひねり、背骨のしなり、腕の力がそれに加わる。斬り下ろす刀が庭石に触れた瞬間、勝手に左手が締めまり、右手は緩まっていた。手に感触はなかった。わずかにかち合う音だけが聞こえた。気づけば庭石の頭に、ずかりと刀が食い込んでいた。

未だ柄から手が離れぬまま、どうやって刀を抜いたものかと考え始めたとき。寝間着の父が、裸足のまま駆けてくるのが見えた。

その朝の内に、剛佐は壺を両断した。父と弟、幾人かの直弟子の前で。初代の伝にあるとおり、据えた台には傷一つつけず――

今。剛佐は枝を手にも、斬壺の構えを取る。何度も繰り返した動き。三步の運足、地を蹴る勢いを刀に込め、振り下ろす。空を裂く音はどうにも重かった。もう一度繰り返しても、音は変わらず重かった。

振り下ろした姿勢のまま、剛佐は身じろぎもせずになっていた。やがて息をつき、肩を落とす。

「こんな枝ではどうにもならぬか」

分かっていた。木刀で素振ろうが、刀で試し斬りしようが。斬壺を使ったことは、若き日の二度だけであったことを。どうしてそれが出来たのか、自分にも分からないことを。

いくらが残った小枝を丁寧払い、再び振ったが。やはり、音は変わらなかった。

斬屋顛末（きりやてんまつ）

著者 木下望太郎

発行日 2021 年 12 月 6 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/273626/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
